法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-04

# <追悼座談会>中本正智さんを偲ぶ

野原，峯子 / 比嘉，実 / 名嘉真，三成 / 加治工，真市 / 仲程，昌徳 / 名嘉，順一 / 糸数，兼治 / 野原，三義

(出版者 / Publisher)
法政大学沖縄文化研究所
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
琉球の方言
(巻 / Volume)
18-19
(開始ページ / Start Page)
104
(終了ページ / End Page)
131
(発行年 / Year)
1995-02-24

Hosei University Repository

# 追悼座談会 — 中本正智さんを偲ぶ

日時　1994年9月17日午後6時－8時
場所　沖縄オリエンタルホテル（那覇市）
司会　仲程　昌徳（琉球大学教授）
出席　名嘉　順一（琉球大学教授）、
糸数　兼治（沖縄県立博物館館長）、
野原　三義（沖縄国際大学教授）、
野原　峯子（沖縄県立中部商業高校教諭）、
加治工真市（沖縄県立芸術大学教授）、
名嘉真三成（琉球大学教授）、
比嘉　　実（法政大学沖縄文化研究所長）

**司会**　中本さんを偲んで、これから彼の人と学問について追悼座談会を行いたいと思います。その場合、全体をいくつかの時期に区切っていくというかたち、ありきたりですが幼少年時代から始めて大学時代、上京、大学院時代そして都立大学時代といったようなかたちがありますが、どういうふうに語れば中本さんの全体を一番うまくまとめあげられるか、野原さん、何かうまいかたちがあれば、お話ししていただけませんか。

**野原**　人と学問という分け方はそうだろうと思うけれども、学問の方はいろいろ話をする人がいるだろうけれども、人の方が、僕が入った時には彼は琉大3年生でした、その当たりからは分かると思いますが、それ以前は分からない。その点についてはどうしましょうか。

**司会**　琉球大学入学以前の中本さんについて、糸数さん、あなたが、もっともくわしいと思いますが、その辺りから行きましょう。

**糸数**　高校まで一緒だったけど、琉大は彼が1年遅れたので、大学ではあまり交流は無かったんです。

**司会**　高校学校時代までの中本さんについて、とくに印象に残っているようなことがありませんか。

糸数　中学校時代はボーチラー（腕白）でしたね。

**司会**　どういうふうなボーチラーだったのでしょうか。

**糸数**　結構ね、先輩を傘にきて我々をいじめるわけよ。徒党を組んでね、2年生、3年生の上級生が奥武島出身でいるでしょう。オーンチャーの悪が先輩にいるものだから。

**野原**　奥武島の人を玉城の陸部の人々はオーンチャーと言うんですか。

**糸数**　そう、オーンチャーといいますね。

**野原**　ボーチラーじゃなくてオーンチャー。

**比嘉**　オーンチャーというのは奥武の人という意味、少し差別をこめたニューアンスがあるように思いますね。オーンチャーで少々乱暴者だった、ウミンチュが多いから、ウミンチューは海に潜っているので耳の遠いのが多い、自然と声が大きくなる。それに魚を食べているから

Hosei University Repository

体も大きいし、農村の人からみたら乱暴にみえるところがあったんじゃないですか。

**糸数**　オーンチャーはしたたかウーマクが多かったですよ、先輩にも。いつもいじめられるものだから、我々がそう言っていた。オーンチャーという言葉はヤナグチする時に使うものですね。(笑い)

**野原**　知念辺りの人でも恐れているわけですか。オーンチャーというからは。

**糸数**　ああ、こわがっていたね。百名とはいつも石を投げあって喧嘩していたね。

**比嘉**　前に中本さんから聞いたのか、糸数さんから聞いたのかはっきりしませんが、、戦争の時にあの辺に疎開して来た子供を中本さんたちがだいぶいじめたとか、あれは戦後ですか。

**糸数**　あれはね…そうそうそう、意味があるんですよ。那覇から綺麗な女の子が入って来たんですよ。それを追っかけた連中が正智と、それからもう一人いるんですよ。ヤストシという、今校長先生していますよ。(笑い) それでね、その同級生というのは都会から来たでしょう、あかぬけているわけね。玉城はウージバタケ（キビ畑）から出てきた女の子ばっかりだから…。ナーファンチュ（那覇人）が来てね、みんなびっくりしたんです。

**比嘉**　男の子は尻を出させて、制裁とか言ってね…やったという話を聞きましたよ。何でもいじめた男生徒のなかに仲宗根先生の娘婿になっている人がいるらしいですよ。

**司会**　奥武の人たちの気性についての話が出ましたが、中本さんにもそれは流れていたということなのでしょうね。

**名嘉**　ウミンチュー（漁師）が多いからやっぱり気が強いんでしょう。やっぱり奥武はほとんどウミンチューだから。やっぱりその辺は気質としてあったかも知れませんね。

**野原**　沖縄ではね、ウミンチューはどこでも言われる。

**司会**　奥武島とはこの辺りでお別れして、大学に入ってからはどうだったのでしょうか、名嘉さん。

**名嘉**　僕と部屋がひとつだったんですよ。

**野原**　寮ですか。

名嘉　寮です。南星寮でよ。正智が1年の時、彼は夜遅くまで勉強していたね。僕は軍作業（アルバイト）夜勤だったものだから、朝方帰ってきても、彼はまだ机に向かっていたね。無理したら体壊すんじゃないかと、声をかけていたよ。寮は半年ぐらい一緒だったかな。

**野原**　1年生の時ですか。

**名嘉**　彼が1年生の時。僕が4年、よく徹夜していたみたい。「君の専門は何か」聞くと「国文です」と、ああそうか、、じゃ仲宗根政善先生のもとに通った方がいいよと、いったよ。僕は夏休みの後はいろいろ事情があって、寮をでた。

**比嘉**　その頃すでに中本さんは方言、国語学みたいなものに…。

**野原**　何を勉強していたんですか。そんなに徹夜して。

**名嘉**　勉強をしていたね、一生懸命。分か

Hosei University Repository

らんよ、とにかく僕は仲宗根先生の所に通いなさいと言った時にはもう…やはり芽が出ていたんじゃないかと思うんですが。僕は何で彼が僕の所に来たのかは分からなかった。僕が卒業して後、比嘉政夫と、照喜名繁夫から聞いて国語学をやるということが分かったんですよ。

**野原**　先ほどのオーンチャーの話からガラッと変わりますね。(笑い)

**糸数**　信じ難いですよ。(笑い) 博士になってね。あれが一番ユーリキヤー（優等生）になった。要するに喧嘩をすると我々にはかなわないんだけど、後ろに先輩が付いているものだから、これをやっつけるとね、すぐ来るわけ。だから手が出せない。鉛筆は取られるわ、帳面は取られるわで。

**加治工**　中本さんは琉大に入ってからカソリック教会に入られたんですか。

**名嘉**　2年生ぐらいじゃないかと思います。僕は全然知らなかったけどね。1年生の時には全然そういう気配は無かったと思います。僕は半年しか付き合ってないけどね。

**司会**　彼がカソリックに行くのは、その時同じ寮におられた島袋伸三さん、下地良男さんに紙上参加というかたちをとって、補いたいとおもいます。

**糸数**　キリスト教徒になったわけですか。

**加治工**　僕らが入学した時には中本さんは、すでに城南小学校の方にあったカソリックの学生寮に居られたんですよね。私などはその辺からしか分からないですね。だから先ほどの暴れ馬から…180度転換して学問をする方に変わっていくわけですけども、その辺がよくわからないんです。

**糸数**　そこがね、全く想像できないね。

**司会**　転機になった何かがあると思うのですが、どなたか心当たりはありませんか。

**加治工**　そこで洗礼を受けられたはずです。しかし洗礼を受けたから急に学問に目覚めるということですかね。

**比嘉**　服部先生が来られたのは…。

**名嘉**　まあその前ですからね、55年。

**比嘉**　中本さんは琉球大学に入学されていたんでしょうか。　まだまだ入っていない？

**糸数**　その先生が来られたのは、我々が1年生の時でね、彼はまだ入学していない。服部四郎先生の講義は3年生、4年生のためのだった。私は受けろと言われて…チャーガヤー（どういうものか）と言って受けることは受けたんですが、全然意味がわからなくてね。

**比嘉**　直接には中本さんは服部先生の集中講義は受けていないわけですか。

**名嘉**　受けていない。

**野原**　2、3カ月1年生の時に付き合ったと言ってたけど、そうれで…あなたは4年生で。その後はどうなったんですか。その2、3カ月からその後はどうなったんですか。

**名嘉**　僕はもう…。彼が2年の時に、比嘉政夫と照喜名繁夫と。その後に彼が来たね。

**野原**　57年頃ですか、方言クラブが始まる…。57年が始まりだそうですが、それの

Hosei University Repository

前ぐらい。

**糸数**　創刊号を出したのは…。

**名嘉**　正智が3年の時だ。

**糸数**　僕は1年も2年ものほとんど大学に行っていないから。ヤマガッコウばかりして、授業は全然出ていない。

**名嘉**　たまに顔を出しよったさ。

**糸数**　4年の時に名嘉さんか誰かに引っ張られて、方言クラブに入れられたんです。

**加治工**　ですからね、3年の時に論文を書かれていますからね、実際には中本さん2年の時に仲宗根先生の「国語学」を受講して、2年の後半辺りから、レポートを書き始めて3年の後半には「奥武方言動詞の活用」という論文に仕上げていますからね。

**名嘉**　仲宗根先生の所に行って、何でもいいからとにかく仲宗根先生のお宅に行って勉強した方がいいよということを僕はしょっちゅう彼に言っていたと思います。寮の時に。彼はまた寮を出てね、あのさくら食堂の近くに……僕の所に訪ねて来て、……酒があるからと言って連れられて行って、それでこういうものを書いたんですがと言う、「あんたは大変なものを書き始めるなぁ」と言ってですね。服部先生のあの……服部先生のあの音韻論をそれをそっくりやっているでしょう。これはたいしたものだなぁと言って。仲宗根先生の所に行くと、仲宗根先生は盛んに褒めて、励ましていたね。

**司会**　先輩から見た中本さんを名嘉さんは語って下さいましたが、今度は逆に、後輩であった加治工さん、何かその辺りのことを。

**加治工**　そうですね、私たちが入ったのは58年でね。僕の場合は宮良當壮の集中講義を受けて、そのときにたまたま野原君と一緒だったものですから、彼が志喜屋図書館から出るときに「方言クラブがあるそうだから一緒に行こう」ということで、彼に誘われて入ったんですよ。入ったらあの時に中本さん、それから照喜名さん、それから比嘉さん、それに川上さんという女の方がおられました。あの3名がおられて、僕ら2人が入ったものですからね、「金の卵が来た」と言ってですね。そういうふうに形容して、非常に喜んで下さったんですよ。あの当時、本土就職する中卒の生徒を、会社関係の人たちは「金の卵」と言っていました。あれから先輩たちとの付き合いが始まったんです。僕らが「方言クラブ」入ったのは後期でしたから、もうすでに創刊号のガリ切りや謄写印刷の準備がなされていたんですよ。それで図書館の4階で授業の合間を見て、謄写刷りを野原君とやった…。

**名嘉**　あの鉄筆はあんたでしょう。

**加治工**　いや、あれは中本さん自身でですよ。

**糸数**　夏だったよ。暑い時でね。ロウが溶けるわけ。500枚が限度だったね。それを千枚も。

**加治工**　いや800枚刷りましたよ。800枚で原紙が切れてしまいました。

**糸数**　創刊号がそうだったよね。

**名嘉**　最初は200ぐらいでいいですよと

Hosei University Repository

言っていた。「いや創刊号だから余分に刷ってよ」と言ってね。

**野原**　謄写版に乗せる時に右に力を入れる、左に力を入れると…。いろんなことを考えながら…。800枚やっていたわけですね。

**糸数**　あれは強く押すとね、原紙がもたない。切れて…800はちょっと刷れないのでね、そうすると下手な人が刷ったやつはもう正智がそばでまた同じ所を切っていたよ。

**加治工**　あれはね、中本さんがオリオンビール会社の夜警のアルバイトをしていて原紙切りをしたんです。あの時に、現在の南部商業の校長をしていらっしゃる宜野座さんが一緒にやっていたらしくて、そのことは中本さんが僕に直接言っておられたんですけどね。あの夜警をしながら1回巡視してくるでしょう、その巡視してきた後は時間があるから、その時にバーッとガリ切りをして。交替々してね、それでガリ切ったんだと言っておられました。

**糸数**　創刊号とはいっても、正智さんの論文だけで……。

**司会**　創刊号の論文について話していただく前に、すこし補って欲しいことがあります。図書館の4階で謄写刷りをしたといった話がでましたが、そこのところ理解しにくいのではないでしょうか。今の学生なら方言クラブができて、クラブ室をもらって、そこでクラブ誌の発刊といった形を考えると思うのですが、どうして図書館の4階だったのでしょうか。

**野原**　クラブ室というのは無かったですね。

**加治工**　図書館の4階は教官室です。国文科の教官室と、歴史学科、英文学科の先生方の教官室、それから端の方に王先生という中国語の先生がおられたんですよ。

**司会**　図書館の4階は教官の研究室になっていたわけですね。国文科でなく、全体の。

**加治工**　そう、全体のです。全教官の研究室でした。

**野原**　北に面した所はそうだけど、東側というか南側の方は何かいつも閉まっていて、あっちは何だったのかなぁ。

**加治工**　歴史、地理の先生方の研究室でした。

**野原**　あーそうか、そこは何時も何か閉まっていて、開かずの間という感じで…。

**加治工**　そして国文科の先生方はね、ちょうど今の高等学校の職員室のようにね、ワンフロアーに机を置いて、そして廊下側の仕切りは、本棚をズラーッと並べて、そこにバックナンバーを入れてあったんですよ。そこ『国文学』や『国語と国文学』などを、パッと見てはね、レポートを書くようにしていたんですけども。

**野原**　先生方がいらっしゃったという印象がないけど、いない時に行ったのかなぁ…我々は。

**加治工**　ほとんど、方言クラブの学生がそこを独占していた。「湧上元雄、比嘉亀盛、嘉味田宗栄の先生方も使いなさい、使いなさいと」そういうふうに言っておられたのを覚えていますね。

**司会**　そこで方言クラブの創刊号が印刷さ

Hosei University Repository

れたわけですけれども、その他、印象に残っている活動はありませんか。

**野原**　まああの頃の事だから一緒に方言クラブで、一緒に調査に行ってもどういうことをやったかよく分からないけれども。1958年の最初に、慶留間の方に行きましたね。慶留間に行きました。どういう調査をしたかもう…。

**野原（峯）**　行ったのは59年です。

**野原**　ああ、59年だ。最初に58年11月か12月頃に行ったのは伊江島でした。名嘉さんと、川上さんと、正智さんと4人でした。何かソーミンタシヤーか何か作って…。

**名嘉**　あれは正智が2年のとき、3年の時か。

**加治工**　あの時は3年です。

**名嘉**　伊江島に行った時は。

**加治工**　僕らが1年の時は彼は3年ですから。

**野原**　4年生は居なかったんだ。あなたはもう卒業しているから。

**比嘉**　中本さんの創刊号に載っている論文の指導は仲宗根先生がされたんですか…。

**名嘉**　はい、ほとんど仲宗根先生がされた。『世界言語学概論』（下）あれは昭和30年に出ているからね。その本を正智は仲宗根先生から借りて参考にしたと思うね。

**野原**　59年に慶留間に行った時は、初めて全員で行ったという記憶だな。

**司会**　方言調査が始まっていくのは58年からということですか。それともその前にあったんですか。

**名嘉**　僕が行っている時は別にクラブとして行ったという…でもないもんね。

**司会**　クラブとしては58年頃から、それとも59年ですか。

**野原**　57年は僕は居ないから分からない。58年は一緒に行ったことになります、59年……。僕らの印象としては初めて方言クラブ全員で慶留間に行ったと。

**司会**　その時、峯子さんも一緒ですか。

**野原（峯）**　私は皆さんの話を聞いて、学問的なものはちっとも分からなくて、ちょうど59年の琉球方言クラブ、第2代目部長となるという中本さんが4年生の時に私は入学したんですよね。いま言った慶留間の調査に行った時に。今もそうかは良く分からないけど、方言クラブの集まりというのは、いつどこで何時にというのは、はっきりしたことは言わないので、なんとなく集まってという感じだったんですよね。それで泊港に何日というのは分かっていたんですけどね、何時に行けばいいのかというのも全然分からなくて、私は石川からとにかく泊港に行ったらなんとかなるんじゃないかって来たら、中本さんが「これぞやっぱり方言クラブだ」って言われて、変な褒められ方をしたことを覚えているんですけどね。とにかく慶留間の調査に行くときは、どういう調査をしたか分からないんですけど。覚えてはいないんですけども。でも楽しかった…方言クラブでどこかへ行くというのは、とても楽しいと言う事を覚えているんですけどね。あの時ですよね、確か中本さんがサメを見て血相を変えて帰って来て。サメが居たと、私は中

Hosei University Repository

本さんはウミンチューで海の事は全然怖くない、魚の事なんかは怖くないと思って居たものですから…あの体でしょ！

「サメがいたぁー」と血相を変えて戻って来て居たんですよね。

沢山お魚も食べたし、楽しい旅行でした。

**比嘉**　あの時代はどちらかと言うと文学の時代だと思う。国文科で言えば琉大文学が花形だった頃なんですが、話を聞いいますと中本さんは早い時代に国語学に的を絞って没入して行ったような感じがするんですよね。

**司会**　そうですね。琉大文学をはじめ、琉大新聞、演劇活動そして学生運動等、国文科の学生たちが中心になって活動していた時代であったといっていいかと思うのですが、そいう所に行かないで、地味な方言研究に進んだ。そこには、何らかの動機がなければならないはずですが。

**野原**　やっぱりあれはどちらかの方でしょうね。方言クラブに入ってしまうと１年生の時は友達だった友人も２年、３年となって行くうちにだんだん遠くなっていく感じなんだ。

**名嘉**　仲里友豪とはどういう関係？

**加治工**　同級生です。

**司会**　中里さんは演劇でしょう。

**名嘉**　彼が１年の時に、土地開争があって、主に国文科の学生が退学させられていくんだよね。学生活動をしている中で僕はクビにならないんですよ、なるだろうなと思って覚悟を決めていたのよ、そしたら嶺井でしょ、喜舎場でしょ、具志さんとかね、あの連中はボンボン７名も退学処分をうけてね。僕は肩たたきみたいになったけれども、「じゃないのか」と言わんばかりに寮官から言われた事もあって。それから僕はプツリと中本とは…。

**司会**　動乱の時代にいたといっていいかと思いますが、そういう中で時代とかけ離れているようにもみえる方言を中本さんがやり始めたというのは、中本さんに強烈な影響を与えた人がいたと考えられるのですが、どうなんでしょう。

**野原**　「行け」という名嘉がいて、行ったら入ってしまってのめり込んで行くという場があった訳だ。

**司会**　それはそれで、名嘉さんが、方言研究に入っていったのは、何によるかといったことがやはりありますよね。

**名嘉**　僕は仲宗根先生の国語学を受けただけで、最初１校時を聞いただけでアイヤーと思って次は「よーし、先生の所を尋ねて見よう」と思って、図書館はあの時はカーラヤー（空き家）だった。「先生質問していいですか、今日のものはあんまり意味がわからんですけど今後どのようにしたらいいですか」と聞いたら、「これを読みなさい」と言うからヨディン、ワカイミ（読んでも分からない）。（笑い）それでも誰か友達いないかと探しても居ないし、先生と一緒になって方言の調査をしました。たまには嘉味田先生が「名嘉君はここにいるらしいな！俺と一緒に行こう」と言って嘉味田先生と一緒に久米島に行った。あれは４年の頃だったかな、嘉味田先生に連れられて

Hosei University Repository

行ったのは。

**司会**　嘉味田宗栄さんの話がちょっと出ましたけれども、方言をやっていたのでは比嘉亀盛さんもおられたわけですよね。琉球大学の国文科には方言をなさっている教官が多かったということも関係しているんでしょうね。

**加治工**　比嘉先生はね、それよりずっと後になって本格的に方言の勉強を始められた。あの頃は近代文学とか中世文学とか、の講義を担当しておられた。

**司会**　中村龍人さん、中今信さんもおられましたね。

**野原**　琉球文学も照喜名さんが早いか、嘉味田先生が早いかって、どうでしょう？照喜名さんの方が琉球文学の研究なんかは早かったのではないか。

**名嘉**　嘉味田先生は文法研究には早かったよ。

**加治工**　琉球文学に手を付けられたのは宮良當壮先生が集中講義で来られて後でした。

**司会**　それは何年ですか。

**野原**　58年ですか、理工ビルか何かで受けましたよ。宮良當壮の特講を。

**名嘉**　僕も午後サボって受けたさ。

**司会**　中本さんももちろん受けたわけですね。

野原　方言クラブは皆受けましたよ。

**糸数**　あの頃いい授業をしたのは仲宗根先生だった。

**野原**　僕は一言半句聞き逃すまいと思って、良いのか悪いのか分からないが最初から最後までノートにずらりと書くばっかり。

**司会**　本格的な学問研究を感じとったんでしょうね。

**野原（峯子）**　1976年に中本さんが、伊波普猷賞を受賞なさった時に祝賀会を方言クラブでやった事があったんですよね。その時に中本さんの挨拶の中で自分がいかに共通語が分からなかったかという一つの例としてですね、小学校入学の時に「明日組分けをしますから」と担任がおっしゃったら、その時に「くみわけ」をするんだったら風呂敷を持って行かないといけないと思ったと言うんですよね。つまりお米を分けると思ったと言う事を言ったんですよね、それをとっても私は印象に残っていて、結局自分の方言に対する目覚めみたいな物があったという事を説明しようとしたのかなぁと思ったんですよね。その事がとても印象に残っております。また、その時に校長先生というのが一番この世の中で偉い人だと思ったと、それで校長先生になる為に大学に行った。今はこうしているとおっしゃって。校長先生になる為にやった事が今は全国的に知られる教授になったんだなぁーという思いで私はその時の挨拶を聞いていたんですけれどね。すごい方言に対する思いというか自分は共通語がいかに分からなかったという事だったと思ったんですけれどもね。

**加治工**　僕はこういうふうな事を聞いた事があるんですよ、彼も島の出身でしょ。島の言葉を科学的に勉強すればきちっとした物が出来るんだと言う事を仲宗根先生の国語学の授業を受けて痛感したとい

Hosei University Repository

うんです。びっくりしたそうです。高校の国語では文法の法則を教え込まれるんだけれども、ところが、奥武方言動詞を自分で分析研究していくと、その中から一つの法則を見付け出すことができる。この喜びを味わうことができたというふうな事を確か言われました。それで自分の奥武方言の方に沈潜していったのではないかと思います。仲宗根先生が今帰仁の方をずっとやっておられたでしょう。1959年に中本さんは『今帰仁方言集』を筆者しているんです。片面には今帰仁を、片面には奥武方言を対照させて筆記した100枚綴りの大学ノートを15冊を既に彼は持って居たんですよ。それを僕に貸してくださって「写しなさい」と言ってね。それで私もあれを写して鳩間方言と今帰仁方言の語彙集を作ったんですけれどもね。すでに大学の2年か3年には筆写していると思うんですよ、『今帰仁方言集』をね。こんな厚い本がありましたね。ですから私が思うには仲宗根先生が自分の方言を深く分析されて、ああいうふうなきちっとした論文を書いておられたので、方言研究に物凄い魅力を感じたのではないかと思うんですよね。そうでなければ「奥武方言動詞の活用」というあの論文をあの若さで書けるというのはちょっと考えられない。

**司会**　今までの話は、沖縄篇といっていいでしょうけれども、そろそろ東京篇に移っていきたいと思います。東京時代の初期は、比嘉政夫さんに紙上参加していただくことにしまして大学院時代からいきましょう。

**名嘉**　それはね、お母さんから僕はお金を借りたのよ、中本のお母さんから僕が。僕が東京へ出ると言ったから「貸す」と言うんですよ。僕はあの時、退職金が出ると思っていて退職金が出なかった。それで退職金が出ると返すという約束でお母さんから借りたよ、相当のお金を借りましたよ。B円だったと思うけれども、それは帰って来てから僕は全部返しました。

**司会**　当時、東京に出ていくということは大変な事だったと思いますが、その先頭をきって名嘉さんが出ていった。その後、中本さんと比嘉さんが続くのですね。ところで名嘉さん、中本さんのお母さんに融通していただいたという話でしたがそれはどういうことなのですか。

名嘉さん

たぶん僕が伊江島に行って来た後、それから中本さんがしょっちゅう僕の所に来て試験問題を作ったり、採点して貰ったりしていたから非常に親しかったわけです。

**司会**　中本さんはそういうお母さんに育てられたのですね。名嘉さんから、中本さんと連なっていく、その連なり方について伺っておきたいですね。

**名嘉**　僕は2ケ年で帰ろうと思っていた。仲宗根先生は「大学院を出てきた方がいいよ」といわれていた。仲宗根先生からも、服部先生からも、今度、比嘉政夫君、と中本正智君が研究生として来るというので、「それじゃ、あと一年残ろう」と

Hosei University Repository

残って、3人で服部先生の研究室に通った。

**比嘉**　国文科の卒業生が、その後、ヤマトの大学院に行くというのがずっと傾向として出て来ましたけれども、服部先生の後押しみたいなことが一時期あったのでしょうか。

**加治工**　それで研究生として1年残って仲宗根先生のもとで、方法論をしっかり勉強するという傾向が出て来ましたね。私がびっくりしたのは、中本さんが研究生の時に、野原君と一緒に赤田でしたよね、赤田の中本さんが間借りしている家は。そこを訪ねた時に『日葡辞書』の原典があるんですよね、『日葡辞書』と言うのは僕らは見た事もなかった。ただ国語史の中でその存在を聞いて、知っていただけで、見た事もない。ところが中本さんのところにはそれがあったのですよ。びっくりしました。ああいうふうにして彼はかなり仲宗根先生の所で専門的な勉強をしていた。理論面は既に大学院で通用する物を持っていたんですよ。というのはね、彼の方言クラブの雑誌1号に出した論文にですね、わざわざ柴田武先生がコメントをしてくださって、この部分をこうしたらどうかという事で『国語学』か何かに出されてあるんですよ。あれを見て、あんな偉い先生が大学2年か3年でまとめた学生論文「奥武方言動詞の活用」にコメントして下さったのにはおどろきました。

**比嘉**　東京大学の服部先生の所に研究生と入る前に仲宗根先生のところでも1年間勉強されていたということですね。

**加治工**　研究生としては2代目ですね、1代目は比嘉さんと照喜名さんですね。

**野原（峯）**　ちょっとこの年表を直しましたか？　直ぐ比嘉政夫さんと中本さんが61年に東京に行ったことになっているが。中本さんは研究生になって、翌年、上京したと思うんです。

**名嘉**　ちがうよ、研究生制度がないけれども仲宗根先生が僕が定時に行ったものだから学校に通いなさいという、通ったら嘉味田先生が非常に僕を気に入ってあちこちに行こうと行って、嘉味田先生がほとんど調査には連れて行ったんです。仲宗根先生は多少がっかりして。

**比嘉**　仲宗根先生の所の研究生としては照喜名さんと比嘉政夫さんが第1で、その次は中本さんなんですよね。東京へは比嘉さんと中本さんが一緒に出で行った。

**名嘉**　はい、そうです。

**比嘉**　東京大学での研究生は何年ですか？

**名嘉**　彼等は1年ですぐ都立大学に行きました。

**司会**　どうして都立大学にいったのでしょうか。

**名嘉**　それはいろいろと理由があったと、思う。学費が安いということもあったと思う。比嘉政夫は、もう都立大学の文化人類学に行くことを、決めていたでしょう。二人して同じ学問をというより、、、。二人は服部先生に相談していないね。先生は少し怒っておられたから、、、。

**司会**　学費が安いという理由で都立大学を選んだという話もありますが、もっと別

Hosei University Repository

の理由もあったのではないでしょうか。

**加治工**　これは私が聞いた話ですが…、僕は平山先生がいたからだと思いますよ。平山先生は国学院でしょう？それから湧上先生が国学院なんですよ。そういうルートがあって、何か指導をお願いするということで、平山先生は出身が鹿児島ですからね。琉球方言に関心が深いわけですよ。

**司会**　都立大学の大学院に入って、研究者として第一歩を踏み出していくことになるのですが、大学院時代の中本さんは、どうだったのでしょう。

**加治工**　大学院は、野原君がダブっているから、あの頃の事情には詳しいんじゃないの。

**野原**　いや、私は存じません。

**名嘉**　ダブっていたでしょう？

**野原**　いや入ったときに、どこかラボかの建物のずっと向こう側の方の何階かに一度訪ねた事はあるけれども、ほとんど会っていません。また学校に入れないような時期でしたから。バリケードして、全然学校には入れなかったんです。

**比嘉**　その頃は代々木上原の和敬寮で沖縄文化協会のオモロ研究会と琉歌研究会なんかもやっていたけど、まだ中本さんは出てきていませんよね。

**司会**　記憶にありませんね。

**名嘉**　どういうわけか東京でのあれには、比嘉政夫は比嘉春潮の所に下宿していたから、1～2回は出たんだよね。ほとんど中本さんは出てこないんだ。

**野原**　何か、通時的なものはあまりやろう言うようなところは、あったのかなーとも思うけれども、しかし琉大の研究生の頃は仲原先生の依頼だったからなのか、オモロの仕事を。理工ビルか家政ビルだったか、仕事をやっていたようですけれど。

**比嘉**　尚家本の青焼きを頼まれ送った事があるはずです。

**司会**　大学院時代に、与那国方言の研究が始まるわけですけど、その研究に関する苦心談や評価については後で触れていただきたいと思いますが、助手時代についてどなたか？。

**加治工**　あのころはね、私も大学院で2年ほど助手をしましたので、中本さんが苦労をしておられたことが良く分かるんですよね。

**比嘉**　あのころ早稲田大学にいた池宮正治さんの証言によると、とにかく物凄く仕事をこなしていて、首が回らなくなっているような時期があったということです。それと口の中の粘膜が、たぶん精神的なものだったとおもうけれども、はげて食事も喉を通らないぐらいの時期がその頃にあったということでした。

**野原**　うん、それは『琉球与那国方言の研究』の巻頭言に平山輝男先生が書いてあるものには、百何日も付き合ったのは彼しかいないというような、その裏の方にはそういうことがあるわけなんでしょうね。

**加治工**　都立の助手を経験した方は、大体同じですよ。僕でさえもこうなったんですから。口内炎はきついんですよ。普通

Hosei University Repository

の助手だったら、まあ、だいたい2日こなせばいいけれど、あそこはそうはいかなかったですからね。助手の本務をやった上に、「都立大方言学会」の世話役に。それからあそこの助手になると、「日本方言研究会」の幹事になるんですよ。その国立国語研究所との順番で来ますからね。自分の番に入った時には、もうあの仕事は大変なんですよ。都立大の助手の仕事は5つぐらいあった。それで、もう寝る暇がない。忙しすぎたんです。これは私も2か年経験しました。それに加えて彼の場合は所帯持ちだったでしょう。それを彼は助手の時にもらしておりましたけれど、やはり生活して行く為には助手の給料だけでは大変なんです。それで他の人に分からないように建設現場で夜働いられた。助手の仕事だけでも口の中がはげるほどなのに、それに夜業までしていたんだよご本人から聞いたんですよ。それにあの頃はちょうど学内紛争がありましたよね。

**比嘉**　そうそう、ちょうど中間管理職みたいなもので学生との板挟みになってね。

**名嘉真**　僕が聞いたのは、建築現場のみではなくて、印刷業にも関わっていたとのことですよ。

**司会**　経済的に凄まじいばかりの奮闘をしたわけですが、それは貧しい沖縄から出て行ったことで当時の留学生の大なり小なり経験したことでもあるとは思います。中本さんの偉さはそういう中で優れた研究を続けられたことでしょう。そして都立大学の教官になります。名嘉真さんは琉球大学から都立大学の大学院に進学したわけですが、、中本さんはどういう教師でした？。

**名嘉真**　僕が始めて大先輩と会ったのは、昭和50年です。聴講生でした。その時の中本先生は品行方正でしたね。僕なんかは髪を長くしていましたから、ヒッピー風にしてそういうのがはやっていたからね。それを「切りなさい」といわれて、先ず大島先生、平山先生が嫌いますと言われました。先ず髪の毛を切ってそれからです。良い先生で懇切丁寧に教えて下さった。これから都立で勉強するならば、都立の学風を守ってほしいと言うことでした。優しい先生でしたが授業なんかは凄く厳しかったです。もう連続して発表させられたり、特に『日本語音声韻論』は厳しいところもあった。そして先生は中途半端な講義はなさらないんですよ。やっぱり資料に基づいて、理路整然とした授業をなさいます。凄く実証的な研究で、先ほどガリ版のお話が出てきたけれども、例えば東京言語研究の服部四郎先生のところの研究所の理論講座があったんですが、『琉球方言解説』というのがあって、あれなんか20枚のプリントをガリで刷ってくるんですよ。ああいうのなんか内容がものすごかった。そういうことをやって本当に学問というのは多言をしなくてよい、ようするに結論は資料の高度さにかかわっている。資料により結論は素晴らしいものになる、そういう学問が必要なんだとおっしゃっていた。本当に学問の素晴らしさというのを先生か

Hosei University Repository

ら教えていただき、やはり凄いなと思いました。

**司会**　名嘉真さんは、中本さんの講義に出席しただけでなく、調査にもご一緒したことがあったと思いますが、調査者としての中本さんの印象は？

**名嘉真**　51年かその頃に、大神島に行ったことがあります。『琉球の方言』でありますけど、それから野原さんも行き、そう野原先生は76年ですね、えーっと内間先生もいらっしゃった。中本先生はもう朝から夜まで調査をするんですよ。僕なんかは朝だけやって、後は整理を午後と夜にするんですが、中本先生は朝も昼も夜もインフォーマントを替えてされる。その上カンダバーを摘んで、ごはんを炊いたり、いろんなことをやって、本当にバイタリティーですよ。僕なんかはついて行けないという感じだっんですが、特に言語が言語研究が好きだったんですよ。その言語を話す民衆というか、そういう人が好きだったんです。

**比嘉**　中本さんが都立に行くまで、音声表記というのを都立大学では使っていなかったというような話しも聞いた覚えもありますけれども、どうなんですか。

**野原**　いや、聞いた事ないですね。

**加治工**　そういう可能性はありますよ。と言うのはね、本土の国語学、あるいは方言学者というものは、カタカナ表記が普通だったでしょう。東大の方が記号を使っていた。それから都立の方が始めるようになったのは、大体中本さんが大学院に入られたあの頃からだと思いますよ。

**野原**　じゃあ東北方言などはどうしていたんですかね。

**加治工**　だいたい仮名書きだったのではないかな。都立はアクセント研究が中心だったから。活用の研究も仮名表記でまにあっていた。

**比嘉**　中本さんが行ってから、琉球方言を研究する必要が出てきて大島さんたちも中本さんと音声表記のことについて一緒に勉強した。平山さんも含めて勉強したというような話しを中本さん以外の人からだったと思いますが聞いたことがありますよ。

**名嘉真**　これは中本先生から聞いたことがある。

**野原**　僕は確たる話しは聞いたことがない。

**加治工**　これは、私は外間先生から聞いたものですが、琉大の方ではアメリカからダイレクトに構造言語学が入ったでしょう。で屋比久先生と成田先生が琉大で講義をしておられた頃、国立研究所では1950年当時、まだそれほど知られてなかったようですよ。それで何か琉大の先生たちをね、あちらへ呼んで勉強会をするという話が出ていたというふうなことを聞いたことがあるんですが。

**野原**　しかし、言語の差というものがあるかも知れん。この琉球方言は音声記号を使わずには書けない訳だから、「ʔｗａ（豚）」をどうしていいのか、「ｔ‘ａ」か「ｔ’ａ」か、どうしていいかわからないから、これはもう使わざるを得ないんですよね、仮名では書けないんですよ。

**加治工**　そう言えば、あの中本さんが入学

Hosei University Repository

されるまでは、都立大学の方言研究では、琉球研究はほとんどされていなかった。平山先生がアクセントの研究をされていたくらいです。本格的に琉球方言の研究を始めたのは中本さんが入ってからですよね。だから、今言われるように仮名を使うだけですまされる状況にあったわけですよね。厳密に「音韻論」を展開するようになったのも服部音韻論が出て、それを琉球方言に実際に適応されてからでしょう。学会全体がそうであったのではないでしょうか。

**司会**　中本さんの業績について触れていきたいと思います。64に平山輝男さんと『琉球与那国方言の研究』を刊行、以後、数多くの著書を著していきますが、野原さんにまとめてもらいましょうか。

**野原**　『琉球与那国方言の研究』は琉大にのこっていた連中は中本さんから2割引きで買ったという記憶がありますね。皆大切に使っていた。あれと『琉球方言の総合的研究』、『琉球先島方言の総合的研究』の3部作というのは、中本さんは血のにじむような調査をやったのだろうけれども、血のにじむといいうのは彼にとっては快感だったかも知れんなー、あれが出発になった。原点の原点ですね。あれから始まって行くんだと思います。山の頂上を見ているとその先の延長線上に『琉球方言音韻の研究』があるんでしょうね。あれを見ないと琉球方言の研究の話をするなんてことは出来ないという気持ちですね。そこでそれをひとまず評価したい。それともう一つ向こうの方に、『図説琉球語辞典』とか『琉球語彙史の研究』とかがあって、ここら辺りは僕ももうぞっこん惚れ込んでいる所です。もう一つここら辺へと進んでいくうちに、だんだんいろいろなものが出てきて、ついに『日本語の系譜』というものまで登場して来るわけです。従来の日本の言語学会では音韻法則が立証されてはじめて姉妹関係が立証されるというふうに言われていた。それをもう理の当然のようにいっているけれども、『日本語の系譜』を見ていると必ずしもそうじゃないんだというような事が、書かれていますね。それからどんどん発展して行ったのかもしれないけれども、そこで終りになって来ます。『日本語の系譜』以前の話しは、非常に実証的で大学院でもこのようにやれと、弟子たちを叱咤激励して『こうこう、こうやれ』と言えるような方法論があるけれども、『日本語の系譜』の方は、さてどんなふうにしたら良いのか、弟子たちを育てる為にどんな方法論をこれに関しては作って行ったんだろうかなー、これからの問題だったかもかも知れない。

**比嘉**　例えばあの3部作に代表される琉球の各地域方言研究は、どちらかと言うと、記述的研究ですよね。その後に『琉球方言音韻の研究』で音韻研究を集大成する研究が続く。それから、『図説琉球語辞典』から『日本語の系譜』にいたるような、語彙を中心にした独自の研究が強く出てきます。『図説琉球語辞典』辺りから彼の学問が、ある意味で言えば野原さんがいう実証的な面から少しずれて、沖

Hosei University Repository

縄で理論化したものをテコにアジア全域の言語を射程に入れながら考察していくということになりますね。後半の仕事については少なからず疑問をもつ方も多いと聞いていますが、波及説はもっと長期的視野で評価されるべきではないかと、素人ながら思いますね。特に歴史を考えるときに豊富なヒントが隠されているようなものを感じますね。

**司会**　中本さんの研究は、そのように音韻から語彙へ、そして系譜へというように大きく広がり始めていきます。その間に、比嘉実さんと『沖縄風物詩』のような仕事もはさまっています。比嘉さんと中本さんの関係は雑誌『言語』を介して緊密になっていったかと思われますが、そこの所を触れておいてくれませんか。

**比嘉**　中本さんと一緒に仕事をやるようになったのは、沖縄文化研究所が出来て、彼が所員に迎えられた時期からですね。それが契機になって沖縄文化協会の仕事を一緒にやるようになっていったように思います。法政のような自由な雰囲気の中で沖縄研究がやれるといいなーといつも私に言っていましたからね。やがてご存じのように法政の沖縄研究そのものが閉塞していくんですが、そのことを残念がっていました。初期の雰囲気はとても良かったですね。中本さんが中心になって『琉球の方言』を沖文研でやり始めて、都立の出身の野原さんや、加治工さん、名嘉真さんたちが原稿を寄稿するようになって一緒に仕事をすることがだんだん多くなってきました。そういう中で研究所や沖縄文化協会主催のオモロ研究会や講演会にも彼が出席するようになってきたんです。それともう一つ彼と仕事をやる契機は大修館書店の『言語』にあると思います。編集長の山本茂男さんをよく存じあげていたものですから、仲程さんとも相談しながら『言語』で沖縄特集号の企画に協力したことがあります。その企画に中本さんに参加していただき、付き合いが深くなっていきました。いつでしたか偶然、琉大に仲程さんを訪ねたら山本編集長が来ていて、「ディー、また沖縄特集をやろう！」ということで、あの大特集号が出来たんですよ。それ以後『月刊言語』で沖縄のことをどんどん取り上げてくれるようになりました。そのすぐ後だったと思いますが中本さんを山本氏に紹介しました。山本編集長はすぐに中本さんの言語研究に注目されて、山本さんを介して九州大学から最近大東文化大学に移られた早田さんとか多くの言語研究者との付き合いを深めていったようです。『月刊言語』に毎号執筆するようになり、後は国語教育まで書くというふうに、とにかく『月刊言語』の代表的な執筆者の一人になりました。とにかく３人で良く新宿２丁目の沖縄酒場を飲み歩きました。そういう付き合いのなかでオモロを百回連載してみようではないか、という話しが編集長からあってあの10年近い「おもろ鑑賞」ははじまったんですね。

それから『月刊言語』のあの沖縄特集号のあと、沖縄を知るため、やさしく、

Hosei University Repository

心に染みるような沖縄物語みたいなものを作ろうじゃないかと、山本さんから話があって『沖縄風物誌』ができたんですよ。中本さんは1月ぐらいで書き上げたんです。奥武の漁民の話を中心に2000枚の大河小説も書きたいと言っていました。冗談でなく実際やるつもりでいましたね。中本さんとは亡くなるまでずっといろんな仕事をさせていただいていたんです。

**司会**　比嘉さんには、後で、人間中本について詳しい話をしていただきたいのですが、ところで加治工さん、中本さんの研究が、語彙から系譜へ変わっていく、そのことに関して何かありませんか。

**加治工**　私には一つ二つ思い出があります。中本さんの言語研究の方向が転換していく契機というのがこの辺にあるのではないかと思っていることがあるんです。中本さんが助教授になられた頃、都立大学に石川栄吉教授という社会人類学者がおられたんです。あの有名な比嘉政夫先生の恩師です。馬淵東一先生の後に入ってこられた素晴らしい先生ですが、その石川栄吉先生を中心にして東大の言語学者である土田滋先生とか、あと人類学者を集めて角川書店が黒潮の研究会をやったのです。毎週土曜日か木曜日だったと思いますが、研究会をもって2～3年ぐらいやっているんです。ある実験航海をやる前です。ちょうど僕も助手をしていた頃でしたから、出ろ出ろと言われて、僕も引っ張り込まれて、「黒潮の民族・文化・言語研究会」というのがありますよね。あのメンバーに入れてもらって勉強させていただいたんですが、あれが一つの転機になっていると思います。というのは、これまではコチコチの構造言語学者でしたでしょう。ここへもってきて、人類学者の南方からアジアの面、あるいは太平洋側から見る目、そういうものをかなり勉強されたんではないかと思うんです。それが一つの契機で、長い間ずっとフィールドをして、まとめてこられた彼のデーターをテックの東京言語研究所で講義をするために言語地図を作製されたんです。地図の上に方言の分布図で描いて見ると、まさに周圏論みたいなものが出てくるでしね。そういうふうになってくると、従来の構造言語学的なものだけでは律しきれない。どうしても、文化の移動とか、海上の道とか、あんなことを考えざるを得なくなったんじゃないかと思うんです。そうでなければ疑問は解けない。『図説琉球語辞典』にこそ、彼の系譜論の原点があると思うんです。そこで理論化されたものをアジアまで広げて適用して見たら、琉球文化の系譜が見えて来たという、そういうものじゃないかと思うんです。

**野原**　われわれの信仰として捉えた日本語学が、金田一春彦が親父の京助の遺言を書いているけれども、「語源や意味論に手をつっこんじゃいけないぞ」と僕は非常に良くわかる気がする。

**加治工**　ただ中本さんは大学院の頃から意味論を既にやっているんですよ。服部先生の意味論というのがあるでしょう、『哲学』の11に入っているもの…。あれ

Hosei University Repository

から意味論が国広先生とか段々広がってくるんです。そして大学での講義も意味論を扱っておられるんですよ。だから中本さんは服部先生の「意味論」でかなり叩き込まれているわけです。つまり既に構造だけじゃどうにもならないということを考えているんですよ。意味の方も築き上げなければならないというふうにして、構造的な意味論を展開しているけれども、そこへもってきて先ほど話しましたように、人類学者たちとの共同研究を契機にして視野がぐーっとグローバルに広がって行くんです。それで彼がこれまでフィールドでまとめてきたものを、『図説琉球語辞典』にまとめてみて、そこから出発して新しい展開がなされてきたんじゃないかなと思います。

**比嘉**　もう一つあるとおもうんだけれども、ずっと記述的な研究を平山先生の後ろに隠れてやっていく、という時代があって、『k音考』を書く時に先生と距離を置くような形で動き始めた。ということはもう一人前の研究者として自分の研究を、オリジナリティーを出さなければいけないと、中本さんにある自覚というようなものが強く出てきたんですね。それ以後ですよね、研究者は書いたものしか残らない、ということを口癖のように彼は言っていましたね。ですから今までずっと下積みでやってきたデーターを自分の解釈で新しく出していこうという、また彼の研究史の上でも、非常に大きな転換期と、それが重ねて出てきたんじゃないですかね。

**加治工**　これははっきり本人が言っておられましたね、私が助手の頃に、僕にもしょっちゅう注意されたんですが、研究者は50代までフィールドを…55才まではフィールドを中心にやっていいと、その後は自分のまとめをすべきだ、自分はそうするつもりだ、とはっきりそういいよったよ。確かに今比嘉さんが言われたように、自分の理論をまとめて、ある意味では独創的な『k音考』とか、音韻のすぐれた業績を残されましたし、それから何よりも、あの『図説琉球語辞典』ですよね、あれだけの仕事をされました。それが中本さんの新しい言語史研究への突破口になったんではないかと思います。

**名嘉**　僕はそれを聞いたんだけど、服部先生から聞いたのだけど、テックでの講義の成果だと言っておりましたが。

**加治工**　たぶんそうですよ。毎回の講義に使った資料を私はずいぶん貰いました。

**比嘉**　さっき名嘉真さんが言ったように、１回の講義に20枚もガリを切ってきたというのはいかにも中本さんらしい、懦夫にはとてもできることではありません。『図説琉球語大辞典』に収録されたのは200ぐらいの項目ですけど、もっと沢山の項目を彼はやっていて、一番現象として法則性が出しやすいものをあれには載せてあるんであって、もっとデーターは中本さんの所には残っているはずです。

**野原**　じゃあ、そこら辺から中本さんの独自性が出てくるわけだ。

**司会**　中本さんの研究の推移と直接関係はないかも知れませんが、彼はドイツ、

Hosei University Repository

オーストラリア、中国といった外国体験をしていくわけですが、そこら辺のことについてどうでしょう。

**比嘉**　僕は帰朝報告を随分聞いておりますが、ボン大学の日本文化研究所や、ウィーンに行ったり、それからヨーロッパ滞在中にパリでの日本学会にも出席されております。

**名嘉**　あれはいつ頃？

**比嘉**　何年でしたか正確ではありませんが80年代の中頃でしょう。そのころから中国、ヨーロッパ、オーストラリア、タイ、とういうように外国に行き始めるんです。ヨーロッパに行ったときには、ウィーンなんかは冬になると濃い雲に覆われて鬱々としたような気候がずっと続くらしいんですが、同時期に滞在したドイツ文学の学者がノイローゼになっていたんだが、自分は何故そうならなかったのかなと…。「中本さんウンジュは、ドイツ語がじょうずだったんですか」と僕が冗談めかして言うと「いやいや、かえってドイツ語の出来る人達がノイローゼになるんだよ」なんてね。毎日のように舞踏会があって、そこに出掛けてはダンスを楽しんでいたようです。「憂鬱を吹き飛ばすように毎日どこかで舞踏会があるんだ。人間の知恵ですね」と感心していました。非常に充実した日々を過ごされたようですよ。

**加治工**　中本さんはそういう非常に進取の気性といいますかね、そういうところもあって、僕なんかだったらね、何かに飛び付こうとしても、一歩構えてしまってね、なかなか行けないんですけれども、彼はね、サッサッサッと行っちゃうんですよ。

**野原**　一番の原点は1959年にね、始めて方言クラブで調査に行った時に、タバコを、川上さんが寝ていたらね、女性だよ、みめ麗しき、あの人はタバコを吸っていたんだよね。口いっぱいにスーッと吸ったら、彼女の髪にフーッとやった。髪の中から煙が出るわけですよ。「大変さーもー」ずっと昔からあるんだよね。

**比嘉**　海外へ行ってきてヨーロッパとアジアの違いみたいなことも盛んに言っていましたね。「ヨーロッパは寂しい、公園ではじいちゃんたちが寂しそうにしている。ワラバーたちの騒ぐ声が全然聞こえない。ヨーロッパはあんまり良くないよ」なんてね。

**司会**　外国を体験したことによって、これまでとは異なるあらたな研究が始まっていったのではないかと考えられるんですが、名嘉真さん総合的なかたちでのゼロから見た中本像をまとめてみませんか。

**名嘉真**　まず、人柄の誠実さは、やっぱりクリスチャンであったことですね。これは大きいだろうと思います。　先生方からも教え子からも大変慕われていました。学生をよく勉強させましたが、勉強以外に喫茶店によく連れて行くし、よく飲みに連れて行くんです。そこでまた議論をして、本当に勉強する雰囲気を作って行ったんです。ですから、学問的な厳しさと人間的には、本当にクリスチャンとして人を大切にしたというふうに思いま

Hosei University Repository

す。

それから学問ですが、先程も加治工先生とか、野原先生とか、比嘉先生とかに言われましたけれども、僕が一番感動しているのは、やはり『図説琉球語辞典』なんです。これは多数の地図がありますけれども、僕も実際に地図を書かされましたからよく覚えているんですが、つまり、中本先生の学問は緻密な記述的な研究の上に比較研究を行っているんです。これは目指す所はやはり比較研究だと思います。だからこそああいうふうに、優れた地図を書いて300枚近く…それから200地点近くの地図を書いて、結局は服部先生がそんなに厳密に出来なかった、古い姿まで再構できたことは凄い広いデーターがあったから出来るわけです。中本先生の学問は比較研究の為に緻密に記述をして来たと言う事です。思うに語彙の研究全てに厳密な音韻論といいますか、そういうものに支えられていた。語の変遷も全てそこから説明していこうということです。だからこそかなり強いんじゃないかと言う事です。

**司会**　比較研究といっただけではよく分かりませんので、どういう形のどういうレベルでの比較研究なのか、もう少し具体的に話してください。

**名嘉真**　同時代的な語彙を全て同じ共時論の上で語彙で比較をして行くのです。

**野原**　沖縄では、頭は「チブル」というんですが、宮古では「カナマイィ」というとか、足は沖縄では「ヒサ」だけど、宮古では「パギィ」とか、石垣では「パン」というそうですね。それを図にしたんです。そしてその図を見たら一目瞭然で直ぐ分かるんですよ。

**名嘉真**　それと文献を用いたということ、つまり『混効験集』とか、おもろ語を用いて説明をしていったという。だから単なる方言だけの比較だけじゃなくて、文献も利用しながら、再構していったというところです。これは中本さんが初めてだと思いますね具体的なもので再構できるというのは中本先生だけだったという。ですから、トップレベルの研究をしていたということですね。

**野原**　ああいう、何を調べるかということについて、あの人は最初から決まっていたんだろうか。『図説琉球語辞典』の語彙は最初からそれをやろうと思っていたんだろうか。何時頃からそれを始めたんだろうか。加治工先生どうですか。

**名嘉**　調べてあるのは全部整理してちゃんと持っていたと思う。

**野原**　ですから最初から何をしょうというようなことではなくて…

**名嘉**　ではなくて、ずっと共時的なものを、横の広がりをこつこつとやってきた、余りまでね…、さて、今度は、今いうようにテックの所で、テックに来るのは皆大学の助教授とか、助手とか、国立の偉い先生方がみんな来ていたというから、そこでそれをやる為には1週間、とにかくうんと勉強をしたらしくて、彼からはそんな話は聞かないんだよ僕は。服部先生は「あーよくやったーっ」といってね、そして暫くしてからこの本が出たからね、

Hosei University Repository

あーなるほど素晴らしい物が出たなと思って…。

**野原**　加治工さんどうですか。その項目設定の最初の…ここはと思うのはどこにありますか。用意周到なあの調査は…、

**加治工**　僕はね、こう思うんですよ。仲宗根先生と一緒に調査していった時はさ、服部先生が作られた、最初の『基礎語彙調査表』があるんですよ。あれが単語数が段々増えて800語ぐらいになりましたよね。あれをね、ずっと大学の頃は使って、夏休みも一緒に八重山までやっておられますからね、一時的にそれを使っておられたんですよ。その後に平山先生と調査されたときには、調査の際の『調査表』を作られているんですが、3500語ぐらいの項目表を持っておられるんです。それで、だいたい一辺に全部が出来るわけじゃないですからね、後で増やされていますけれども、その調査票を持って平山先生と、ずっと与那国から奄美まで通していかれますよ。そういう意味で、名嘉真さんが言うように凄いデーターを一人の目と耳で採録しておられるわけですよ。均一的な資料を。全琉くまなく調べていくということは、これは他人の真似の出来ないことですね。

**比嘉**　琉球列島だけじゃなくて、日本列島全域じゃないでしょうか。長崎の五島列島に行ったり、八丈島へ行ったり、能登へ行ったり甲府へ行ったりね。火葬場でお骨を捨うまで、そこで待ち時間があって1時間ぐらい話し合いがあったんですが、その時に「一人の耳で日本列島の言語を最も多く聞いたのは中本さんじゃないかな」と大島さんにいったら、「いやいや、平山先生です」という話はありましたけどね。一人の耳で、そういう記号も統一した一人の個人の耳で聞き取った資料を持っているという意味で、中本さんは凄いデーターを持っていると思いますよ。

**司会**　中本さんの仕事に関して、まだまだ語り残したことがあるかと思いますが、彼の魅力は何よりもその強烈な個性にあった気がいたします。そこのところを糸数さん、中本はこういう男だったと。

**糸数**　そうですね、ウチナーンチュの中のウチナーンチュといった感じですね。もう、何と言うか、茫洋としてあんまり形容出来ないね、素晴らしい人だったな。後20年ぐらい生きていたら、どういう仕事をやっただろうかなー、と思うんですけどね。言語学というと、我々歴史をやっている人間は、普通はあまり役に立たない、音韻法則とか、あんなのばっかりで、内部の話ばっかりでしょう。全然おもしろくないんだけれども、中本さんの言語学というのは、それを越えて、多少論議のある所もあるとは思うんだけれども、随分歴史的な分野にも切り込んできている。だから多分、その言語研究を通じて沖縄文化の本質というか、そういうものに迫りつつあったんじゃないかなという感じがするんです。

**司会**　峯子さん。

**野原（峯）**　先ほど80年代に入ってヨーロッパ、中国など外国へ行かれたと、そ

Hosei University Repository

の中の一つだったかと思うんですけれども、ドイツから帰って琉大へ集中講義の為にいらした事があったんですね。その時中本さんはクリスチャンですから、セミナーハウスに宿泊していたんですが、その時に中本さんから電話があって野原と、中本さんと私3名で居酒屋で飲む機会があったんです。皆さんもお聞きになったかと思うんですけど、ドイツに着いた時に飛行場に迎えに来ているはずの人が誰もいなくて、全員降りて、皆が帰った後、たった一人になって、とうとう大学を訪ねていったんですって、そしたら、迎えに行った人が「日本人は一人もいませんでした」と言って帰ってきたと言って、もうその事を本人は本当に面白そうに話をしているんですよね。それを聞いて、野原と二人はもう大笑いをして、楽しい思いをして飲んで過ごした事があったんです。

私の中で中本さんというのは、私が1年生の時に4年生で大先輩でしたから、その気持ちがいつまでもあって、「中本さん」と言うと何時もニコニコ笑っていて、暖かく見詰めていてくるような、そんな優しい先輩でした。学問については、私は全くやりませんで、分からないんですけれども、そういう一人の先輩、優しい、素晴らしい先輩がいたということを、非常に私としては良かったなと思っています。

**司会**　三義さん、ちょっとヤナグチでも…。

**野原**　学問をやるためには環境があったと思うんです。仲宗根先生とか名嘉順一さんとか、そういう偉い方々がいて中本正智さんもそこにいたんでしょうね。あの人が大学3年生の時に、僕は初めて悪の道に染まったことがあるんです。あの人から煙草をせびって飲んだのが、煙草の吸い始めですね。良きにつけ悪きにつけ、いろんな影響があったんですね。学問の方も一生懸命やっていたけど、ああいうことも一生懸命だったよね。一升瓶をかついで中城伊舎堂の比嘉亀盛先生の所に行って、帰りのバスは無いのに、どこまでも歩いて行くとかいうこともあったですね…。学問のその雰囲気を作って下さったなー、そういう事ですね。

**司会**　酒を飲べばヒヤーマッタイの乱調子は、野原さんとと中本さんの独壇場だったのではないかと思うんですが、発狂仲間で濃密な楽しい時間を過ごされたのではないでしょうか。

**野原（峯）**　とっても楽しい人じゃなかったですか。

**比嘉**　お酒と踊りが大好きでした。禿げた頭に手ぬぐいを被って踊っていた姿は忘れられませんね。

**野原**　あんなに真面目に勉強をやる人がね、酒を飲まなければ良かったんですよ。ちょうど85才まで生きられたのに、酒まで飲むから…。突っ走ったなぁ。

**司会**　糸数さん、あなたもその仲間だったのではないですか。

**糸数**　いやいや、中本さんとは酒を飲む機会がなくてね。

**比嘉**　この話は初めてかも知れないけれど、中本さんはどうも南より北が大好きだっ

Hosei University Repository

たんじゃないかなー。　カラオケで歌うでしょう、すべて北の歌なんですね、「北の旅人」、「津軽海峡冬景色」、「さざんかの宿」とか、しかも不倫ぽい歌が多いですね。クリスチャンだったら神様に怒られてしまうじゃないか、本当に心配だなあ僕は。(笑い)

**野原（峯）**　いやいや、中本さんは以前にですね。東京は汗をかかないと言っていたんですよね。さっぱりと、カーッとした暑さじゃない、東京の暑さじめじめしていて、こう沖縄みたいじゃないよ、と言っていた事があるんですよ。汗をかきたいと言っていました。

**司会**　加治工さんは、酒を一滴も飲まないということでは、中本さんとは異類といっていいのでしょうが、酒を飲まないでの関係というのもあったはずです。

**加治工**　私はいろんな面で非常に可愛がられたんです。またある意味で、私も鳩間島という小さな島出身で、中本さんも奥武島という島の出身なんですよ。いつも、私に「お前もシマーだ」と、「シマーは島の文化を徹底的にやるべきだ」と。島出身だという共通認識といいますか、そういう世界観みたいなものがあったのかも知れませんけれども、非常に可愛がられたし、学生の頃もそうです。大学院に入ってもそうですし、助手をしていたときもそうでした。特に助手をしていた時は琉大とは一週間違いでこんなことになってしまったんですよ。それで仲宗根先生と、湧上先生が取り消すから…という、いろいろあったんですけれども、そういうわけにもいかないということでこのままできたんですけれども、そのときも中本さんが非常に親身になって色々と考えてくださったんですよ。それで、とにかく「東京に来るについては、何も心配はない、自分が全部責任を持つ」ということで、本当に僕は住む家もまだ決まっていなくて、それで羽田に着いた時は、埼玉から車を飛ばして来てくださって、自分の家に連れて行って、東京で宿が見付かるまで一週間ぐらい世話になったんです。ああいうことがあったんです。あんなことは今の僕に「やれ！」といわれてもなかなか出来ない。それから又、都立大学を辞める時も、山口大学に行った時も、シンジントゥグヮーいわれたんですよ。「お前、本当に行くのか？」といわれてね。「ここにおればエスカレーターで上がるんだよ、自分が行く行くは責任を持つからね、そして自分が後押しをするんだから、お前さえよければ良いんだよ、良いんだよ」と行って、いつもそう言われていたんです。何といいますか、特に我々は琉大出身という形で、昔からの友人であったということもあったんでしょうけれども、とにかく親身になって最後まで世話をするというか、僕にとってはそういうふうな人だったなー。もう精神的にも頼りきって、学問的にも頼りきっているような、そういう感じの人でしたね。

**司会**　研究部分野は異なるけれど、もっとも親密な交流があったのは比嘉さんだったのではないでしょうか。

Hosei University Repository

**比嘉**　苦しい体験をしてこられたので後輩にはいい環境でのびのびと研究させてやりたい、という思いが強かったですね。学問的には厳しい人でしたが、とにかく、弱いものにやさしく思いやりに溢れた人でした。それに歯並びの美しい笑顔は人を魅了しますね。権威主義からもっとも遠い人でした。私の家の近所に小さなスナックがあって、そこの社長室に「その人は去り行くもその人の微笑みは残る。その人は去り行くもその人の温もりは残る。その人は去り行くもそのひとの言葉は残る」と書かれた短冊があるんです。ウリンージュルカージ（それを見るびに)、中本さんの面影が浮かんできます。そういう方でした。

**司会**　さて、名嘉さん。言語研究への道を、先導した先輩として一言。

**名嘉**　僕は、今さっき言ったように、踊っているところは見ていないんだよなー。だから「よく踊る」と言う話を聞いて、エーッと思っているんだよ。

**野原（峯）**　博士号を受賞した時も踊りましたよ。

**名嘉**　見ていないんだよなー。僕の印象としては、寮にいた時は、とにかく一生懸命勉強をしていた。その印象がある。それと桜そば屋に行った時も、沖縄での印象は僕はこれだけしかなくて、そして東京に来ては、中本と比嘉政夫と僕の３名は常時あちこち行って、僕はもうあの頃から既に旅行をした方がいいだろうと言って、旅行ばかりしていたけれども、東京での最後の時は…。

**司会**　中本さんの人と学問について後から来るものに引き渡していく大切な仕事があると思うのですが、その橋渡しの一番重要な任をおっているのが名嘉真さんかと思います。まとめて締め括ってください。

**名嘉真**　まず、私の中本先生は、やはりいい先輩であった。方言クラブのいい先輩であったということと、本当に良い恩師であったということです。本当の宮古方言の研究者はいなかったということで、親身になって育ててくれるという、そういうことを優しく持っていた方ですね。そういう意味では本当に琉球方言を、大事にされて大切に考えていたんだろうと思います。ですから、先生のその学問は、後続者が育ってその後輩に継がれると思います。中本先生の学問は何かといいますと、沖縄的な優しさじゃないかと思います。本当に沖縄の方言を愛さなければ方言研究は出来なかっただろうし、本当に優しい方だったと思います。僕なんかが琉大に来る時に、分かれる時に万年筆をもらったんですよ。就職の時に、今から15年ぐらい前ですけれど、その万年筆を今でも大切にしているんですが、凄い高価なものなんですが。中本先生は、自分たちの身内の研究者というものをとても大切にしたんですね。

ですから、そういうことを後輩にも伝えて、やはりもっと琉球方言を大切にして、調査をして、そして残して行くと、そういうことをしなければいけないですね。もちろん中本先生の業績を受け継い

Hosei University Repository

でいく意味でも努力しなければならないと思います。

**司会**　ありがとうございました。予定の時間も使い尽くしてしまいました。酔いも深くなってきましたので、これで一応終わりにします。しかし、これからこういう機会はめったにないと思いますと、あと少し将来の展望といいますか、中本さんの研究の秘めている可能性について語っていただきたいという欲もあります。

**加治工**　そうですね。これは当っているかどうか知りませんけれども、恐らく中本さんは晩年、語彙の研究の方にウエイトを置かれて、その語彙を比較していくことから、かねて中本さんが得意とされていた、音韻法則がどういうふうに変化して行くかということを見付け出して、一定の変化の法則を見付け出していったのが、この『図説琉球語辞典』なのかと思うんですけれどね。その理論を全日本、あるいは全アジア的に段々広げていった結果、中本さんの「波及説」というふうなものが段々具体化してきたなーと思うんですよ。これは、ある面で僕は批判もあります。しかし、またラオスとか、雲南省の少数民族の民俗調査をしたり、言語調査をしてきていますので、「あれ！」と思うところがあるんですよ。生活文化、習慣など、生活環境もそっくりなところが多いですね。だから、中本さんの「波及説」はまだまだ確定した方法ではなかったかも知れませんけれど、それをもっと緻密に重ね合わせて行けば、もっとおもしろいものが出てくるのだろうと思うのです。まあ、中本さんにしてみれば、志半ばにして亡くなってしまわれたものですから、その最後の「波及説」の理論が完璧なものになっていないというのが惜しまれる訳です。これは我々が引き継いで補完していきながら、どういうふうに発展できるものかどうかということを検討していかなければならないと思います。

確かにウイークポイントも現段階ではあるんです。しかし、アジア的な広がりで、言語の波及して行く姿というのを初めて言い出したのは、中本さんではないかと思うですよね。ああいう方法論も一つの方法だとおもいます。中本さんがやられたような形でアジア的な規模で、もっと網の目の細かい調査をして被せて見た場合に、どういうふうな言語分布図が出来るのか、そういう作業を進める中で、またどういうふうな理論が再構築されて行くのかと、ちょっと興味のあるところではあるんです。

**司会**　野原さん。

**野原**　一言もない。

**司会**　ない？本当のところは？

**野原**　村山七郎と大野普の大論争が繰り返されていて、ただ国語学者はどうなるかなと思っている訳だが。

**名嘉**　僕もあれを読んだ時はね、あんなに年を取ったら、こうなるのかなーと思った。

**野原**　まあまあ、あんなにやって、あんなになっているんだから…。翻って、言語とは何だろうかとかね、チャンプルーは

Hosei University Repository

チャンプルーとかいってバアーッと、こう広がって行くのだろうし、スー、アンマーも大して重要な語じゃなく、無いんでしょう、あっちからターリーが入って来たら、ターリーを使ったり、パーパーを使ったりとかね、もう食べ物やら何やら、そういうようなもの…、言語じゃなくて、これは言語波及の話なんだ。文化波及論なんだ。言語文化の波及なんだ。従来の言語学とどういうふうになるのか、どういうふうに…。これからだったと思うのね。

**野原**　そうです。

**比嘉**　そういうヒントを与えてくれるんだよね。

**司会**　比嘉さん、中本さんの入院先に何度も足を運ばれて、いろんな話をしたはずです。その話の中で、中本さんは、これまでの研究そしてこれからの研究について話されたのではないかと思いますが、その辺はどうですか。

**比嘉**　これは病気になる前だけど、沖縄もそうだけど、ヤマトの言語史は文献に偏り過ぎると、あれだけ日本の全地域を、一人の耳で聞いているから、方言研究の成果を取り入れればもっと基層の言語に基づいた言語史が出来るんじゃないかなーと話されていました。沖縄だったらもっとそういうものが可能であるから、そういう言語史を書いてみたいということがひとつ。これは『図説琉球語辞典』の延長に構想されたものだと思うんですが、沖縄古語辞典を作りたいと、文献も使うけれども、基本的には多様な琉球語で再構した古語辞典を作りたいと、それから奥武島の方言辞典も作りたいということでした。

**野原**　それは初めて聞いたなー。

**加治工**　それは何度も言っておられましたよ。

**比嘉**　それとオモロの仮名づかいを含めた全訳の仕事をやりたいということを言っていましたね。我々が国際学術調査で中国の調査に行くのが90年ですから、彼の発病したのは、その年の暮れです。秋の検診で胸に影のあるのが発見され、医者から中国に行くのはよしなさいと言われたんです。すぐに手術することになり、経過は非常に良好でした。本人も前よりもずっと調子が良いというふうなお話をされていました。しかし、奥さんがふと僕に何気なくですけれども、「比嘉さん長引くかも知れません」とつぶやかれたのを聞いた覚えがございます。私の幻覚かもしれませんが、、。普通でしたら、病後ですから奥さんは止められるはずですけれども、能登の調査に行くことも、半年後に中国の調査に行くことも許しているんですよ。私の考え過ぎかも知れませんが、今から考えるともう好きな事をさせなさいと言われていたんじゃないかなぁーという感じもしますね。私の幻覚でなかったら、苦しい思いで奥さんは毎日を過ごされていたんじゃないかと思います。「進貢使節が通った旅を経験しましょうか、中本さん」と言って中国への旅にお誘いして91年の暮れに山本茂男さんと3人で出掛けました。彼との最後

Hosei University Repository

の旅になってしまいました。言語地図を作る為に、福健師範大学の言語学者の李先生という方と協力してやることになりました。僕は前から知っていたものですから、その先生を紹介して中国の特に江南辺りから福建省あたりにかけての言語地図を作ってみようというになりました。李先生と打ち合わせを済ませ報告書を出す時にはお二人が協力してやることになりました。その旅の途中から、どうも中本さんの様子がおかしいんですよ。言葉を間違えたりするような…。「おかしいなあ」という雰囲気が少しずつ出ておりましてね。そしたら帰って来たら、又、入院しなければいけないと、奥さんから電話があったんです。そして僕が行った時には非常にもう体力を消耗していておられました。それから持ち直されて暫く家に帰っておられました。やがて双愛病院という近くにある病院に入られた。山本書房の山本茂男さんとお見舞いにいきましたがお話しすることはできませんでした。帰る時に、僕は奥さんに、「調子が良い時は、とにかく何時でも良いから呼んで下さい。飛んできますから」とお願いしてあったんですよ。亡くなる一月まえに奥さんから研究所に電話をいただきました。非常に調子の良い日がありましてね、私はすぐに病院に向かいました。本当にお元気で、痩せていないんですよ。普段だったらもうちょっと色が黒ずむはずだけど、色がピンク色できれいなんです。しかも目に曇りが無くて、力強さはないんだけれども、とても澄んでいるんですよ。あぁーこのままだったら、又、元気になって、僕たちの所に戻って来てくれるかなーというふうな気持ちになりました。それで僕が行くと、「あー、比嘉君」といって、ちゃんと分かりましてね。「オモロのテキストも出来ましたよ、全訳があるといったじゃないですか。もう長い休暇を引き上げて、もうそろそろ戻って来て下さいよ」と冗談を言いながら、その日はとにかく調子がよかったんです。ある意味ではすべての運命を享受しようと悟っているような感じの雰囲気だったんですよ。もの静かな雰囲気で。30分ぐらいいろんな話をしましてね。帰りに奥様は病院の玄関まで私を送ってくださって、「少しでも１％でも可能性があるのであれば、治療しなければいけないから、比嘉さんまた大塚に移りますよ」ということを話されたんですよ。それからすぐ移っていろんな治療をやったと思うんですけれども、２月24日の早朝に奥様から電話が掛かって来て、お亡くなりになったということでした。もう覚悟はしていたもんですからね。それからご報告したいんですけれども、あれだけの資料が何処にいくのかなーと、誰かがその中本さんの持っている資料をうまく活用しなければいけないがなー、というふうに危惧していたんです。次男がアメリカに留学して行っていたんですが、その子が社会人類学をやっておりましてね、親父さんのやっていた事に興味を持って言語学を学んでみたいということで、今年の４月頃から、千葉大学の内間先生の

Hosei University Repository

所で琉球方言を含めた言語的な訓練を受けています。琉大でもというふうに奥さんにお話したんですが、やっぱりあんまり無理は言えない。あれだけ入院されていたし、それから家も作って、生活も大変だろうというふうに思うもんですから、無理は言えなかったんですが、内間先生の所で学んでいます。今後ともぜひ皆様方には、その次男のことは気に留めておいていただきたいなあ、と思います。

**司会**　初めのほうで聞くべきだったかも知れませんけれども、仲宗根言語学…そういう言い方はないでしょうが、仲宗根政善さんと中本正智さんの繋がりといったのはどうなんでしょうか。

**加治工**　基本はね、「仲宗根方言学」なんですよ。僕が助手をしていた頃、ご本人が何度もそう言っておられたし、「自分は故郷は仲宗根言語学なんだ、東京に行ったのは、それプラスアルファーだ」という感じの話をしておられました。

**司会**　仲宗根さんとの違いという点ではどうでしょうか。

**加治工**　これは、僕の印象ですけれども、仲宗根先生をあまり意味論はなさらなかった。中本さんもスタートの時点では意味はタブーにしておられたんですけれども、だんだん意味の方にも入って行かれた。それで最終的には彼は、語彙研究の方にシフトをして行かれました。その語彙研究というものを、仲宗根先生は今帰仁という限定された地域で、掘り下げられたけれども、中本さんは最終的には奥武というところをめざしているわけですが、その前に広い地域を調査し、研究して行かれたんです。その「語彙の調査が面白い、面白い」と言われてね、いつも言っておられたんですよ。中本さんから彼のそういうアドバイスもあって、僕もだんだんこの語彙の方をやらなきゃいかんなと思いだして、僕の方は少しずつ語彙を集めて、『琉球の方言』にも載せてもらっているんですけれども、ああいうふうな形で研究を広げられていった訳なんです。また宮良當壮の影響もあると思うんですよ。というのはですね、「宮良當壮を読み直した方がいいよ」といわれてですね。だから言語学者というのは、最初はそういうふうに音韻とか、ああいう構造的な所からスタートしていくが、やっぱり円熟していくと意味研究とか、語彙研究に行くのかなと思いましたね。

**司会**　野原さん。

**野原**　それは掘り下げる厳密と、比較の厳密というのは似ているでしょう。一か所を掘り下げるということと複数を掘り下げるというのは当然同じような段階では出来ないだろう。でも、厳密にという点においては、橋本の厳密を伝統を受け継いでいるでしょうね。あの波及論になると、服部四郎という人にも「どうでしょうか」と聞いてみたいけれども、「中本先生のことは僕は分からん」ということです。

**加治工**　あそこは中本さんのね、オリジナリティーだと思うんですよ。統一化、法則化を重視して研究を進めるのだったら、ああいう研究はむつかしいと思う。しか

Hosei University Repository

し、がっちりした構造言語学的手法で基礎となるの元にデーターを集めていって、きちっとした言語地理学的な方法を踏まえながら方言地図を作っているという点に、やっぱり信頼性が出てくると思うんです。普通の人がやるのとはちょっと違うという気がします。仲宗根先生はどちらかというと、非常に禁欲的で、こう切り捨てて、今帰仁ではこうなって、後はオモロでは、こうなっているという実証的な方法で通しておられるという、ふうな感じでしょう。中本さんは、そういう意味では基本は仲宗根先生の視点に腰に据えながら広く、語彙の広がりをみていったと言う点に、何か肉付けされているような感じがある。

**司会**　名嘉真さん、中本さんの学問研究を発展させるにはどういうことをする必要があると考えますか。

**名嘉真**　今ね、加治工さんが適切な意見を言われたんですよね。仲宗根先生の学問と、それから中本先生の学問。それは本当にその通りだと思うんですが、僕が感じるのは、やはり仲宗根先生は方言学者であったと、それから国語学者であったということだと思います。もう一つは中本先生は更に言語学も学んだということだと思います。それはどういう部分かと言いますと、やはり仲宗根先生の、深く掘り下げていくという、一つのものを正確に記述して行くという、そういうこともされながら、結局服部四郎の学問的な方法論といいますか、それも身に付けていっただろうというふうに思います。これはやはり比較方法ですよね。それで仲宗根先生も比較方法はされているんです。『カ行変格の動詞』のいわゆる沖縄本島北部の方のね、あれも凄い論文なんですけれども、遡り方が近いんですよ。ところが中本先生の場合は、まさに遡り方が遠くまで遡るわけです。つまり変遷過程をどう捕らえるかということ、それから言語学者がそれをどう捕らえるかということ、もうちょっと分かりやすく言えば、方言学者は例えば琉球方言の「音」を表わす「ʔｕｔｕ」はただ「ｏｔｏ」から来たと言う。元は五母音だから「ｏｔｏ」から来たと考える訳ですけれども、言語学者はそうは考えない。つまり乙類オなんですね。「音」の場合は両方とも、乙類のオなんですけれども、そう考えると奈良時代に分岐して来たと考えられるわけなんです。琉球方言は奈良時代以前に分かれてきたから、当然その変化過程も２類のオなんだけれども、もっと遡る形を考えるわけです。そういう所が方言学者と言語学者との違いなんですよ。その綿密な所を中本先生は学問的にもっていると思います。つまり国語学者であったんだけれども、すでに服部言語学を理解しておられたと思います。

**司会**　これで終わりたいと思います。どうもありがとうございました。